

ママは「最近やけに暑いわね」と言っ、首元にタオルを当てがった。本当に暑かったのである。

パパは「そうだな」と小さく呟いた。パパはママの首元の蚊に刺されを、不倫の印だと思っ、勘ぐった「そうだな」を言っ、たつもりだった。「あいつは今、その首元をタオルで隠したんだ」

犬は「人に向かって「ワン！」と吠える。（母さん、水受けが空っぽだ）」

ママは「はいはい、お散歩ね。でもちよつと待っ」といっ、て犬を撫でる。別にちよつと待っこともなかつたのだが、そう言う方が雰囲気が出るかなと思っただけだった。

（ここでインターホン）

「あら」

ママが急いで玄関口に向かうと、パパは「いい、俺が行くよ」と言っ、た。何の根拠もなかつたが、今ドアの先にいる郵便配達員が、ママの不倫相手だと思っ、たからである。ママは「ありがとう」と言っ、て微笑んだ。

「こちらに印鑑を」「どうも」

パパは郵便配達員を眺める。上から下まで。何か残穢が残っ、ているような気がして、眺める。

郵便配達員はそれに気づいたが声はかけない。（もしかしてこの人、ゲイなのかな？）

郵便配達員はゲイだった。根拠のない勘だが、そういう勘の世界なのだ、僕たちの生きる世界。ここで声をかけるべきだったかもしれない。しかし郵便配達員は今日の夜、予定があつた。ボーイフレンドと会う予定が。

「じゃあどうも」

郵便配達員は去っ、ていく。今日は定時に帰らないといけな

い。パパは荷物を持っ、てリビングにやっ、て来る。「これ、お前の荷物だぞ」（やっ、ぱりあの男、ママの不倫相手だ）